September 2013

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報　第69号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Page 1 ……
巻頭言
あの日わたしは
木庭元晴

Page 2 ……
バス1日巡検報告
淡路島の農業と鳴門・徳島・吉野川デルタ
酒井啓祐

Page 3 ……
実習調査報告
楽しかった帯広市での実習調査
久保美佳

Page 4-5 ……
研究ノート
北京における八旗の所領範囲の復元及び風水思想
張　立宇

Page 6 ……
ホームページ開設のお知らせ

今後の研究会行事

Page 7 ……
卒業論文・修士論文一覧（2013年3月卒業・修了生）

教室だより

Page 8 ……
随想
時間的隔たりの克服
―地誌を担当して―
正木久仁

新入会員より
Page 2-3,6

新院生紹介
Page 7

あの日わたしは

木庭元晴

標題はNHKの東日本大震災の体験ビデオ集のタイトルである。毎月曜日～木曜日に放映されている。ぼくはかなりの本数を見てきた。個人が如何に津波から逃れたかという体験談は嗚呼そうですかという感想しか生まれないが，自ら厳しい環境のなかで一人でも助けることができた方の体験談は感動を呼ぶ。NHKも極力そういう人々を探してきたのだろう。

最近（６月末），宮城県南三陸町立戸倉小学校長麻生川さん（54歳）の体験談が再放送で放映された。これは読売新聞2012年３月15日（中川慎之介）の記事が初出らしい。津波避難マニュアルでは，避難先は，学校の前の国道を渡って約300メートル離れた高台であった。校長は専門家の講演で早い場合，津波は地震後３分で来る，避難先として３階なら高さは十分と聞いていて，避難先として３階立ての屋上がより適切と日頃力説していた。しかし，「それでも，あの地震の直後，迷わず高台を選んだ。これは感覚的なもの。それほど尋常でない揺れだった」という。

小学校の３階の建物は津波に呑まれて全壊した。マニュアル通り，91人の在校生とともに高台に避難している時に，更なる危険を感じて，より高い神社まで階段を上って全員が助かったという。高台も津波に呑まれたのである。記事は校長の次の感想で終わっている。「マニュアルを書き換えていたら，あの時，私が屋上だと指示していたら，とんでもないことになっていたかもしれない。（地元出身の）ベテラン教師は屋上への避難にずっと反対していた。自然を相手にする時は，想定を超える想定をして，それでも瞬時の判断に頼らざるを得ないのだと実感した」。

地震から約10分後には高台への避難を完了したという。このケースについて，僕は考え込んでしまった。津波が来たのは地震後40分ぐらいからであったから，結果として高台側に避難したのは幸運だった。これを判断が正しかったと表現するのは誤りだと思うのである。NHKのこの体験ビデオでは校長のそばに中年教師が付き添っていて誇らしげに，爺さんだか婆さんに聞いた「陸続きの高台」への避難が正しかったと言い，校長も言い伝えは正しいというニュアンスで応じた。

前述の「それでも，あの地震の直後，迷わず高台を選んだ。これは感覚的なもの。それほど尋常でない揺れだった」ということは極めて近い海域で地震があったかも知れない訳で，早急に３階建ての屋上に避難して全員が助かったかも知れないのである。咄嗟の判断が正しかった，という評価は誤りで単に幸運だったと言い換えた方がいい。マスコミのこの種の記事構成は，何が正しい判断か，何がヒューマニスティックかという形で展開される。

「東日本大震災の記録　大津波の悲劇・惨劇の報道を追う」というウェブサイトがあって，ここには河北新報の記事が整理されている。南三陸町の防災対策庁舎で津波到達までの30分間「大津波警報が発令されました。町民の皆さんは早く，早く高台に避難してください」と上司とともに放送し続けた危機管理課職員遠藤未希さん（24）の死は多くの人々の感動を呼んでいる。この防災対策庁舎に避難した役場職員三十余名のうち，無線塔にしがみついたりして生き残ったのは10名であった。この庁舎は津波に完全に呑み込まれた。地震直後，災害対策本部が設置された３階建ての役場庁舎も，防災対策庁舎同様呑み込まれ全壊して町長を含め８名が生き残った。庁舎に残るように強制されたとして遺族の訴えもあるが，役場機能の面目躍如であって，職員達は高台避難することは思い及ばなかったことであろう。消防士や警官など公的役割を担う者の避難の形は当然ながら異なる。

津波を見てから逃げて幸運にも助かった人々は，「次は必ずすぐに逃げる」という。これは不摂生な生活をしていて大病になって何とか回復して今度こそ健全な生活をします，と宣言して実行するよりもずっと難しいことである。次の大津波はいつやってくるのか，科学であっても全く予測がつかない。この南三陸町は今回，17,666人中，4.49%の793名の死者および行方不明者（2011年８月31日現在）を数えた。1896年の明治三陸津波の際には1240名がこの南三陸町で亡くなっている。これから小さな津波が繰り返しやってきて希薄化することに加えて，「あの日わたしは」は忘却の海の私になる。

（本学教授）

新入会員より

合内美優
受験科目で地理を選択し、勉強していくうちに地理が好きになり、この専修に進むことを決めました。世界の地誌に関心があります。よろしくお願いします。

岩崎　澪
出身は西宮市で，音楽やバレエ，ミュージカルが好きです。観光に興味があります。よろしくお願いします！！

大丸恵梨加
京都府長岡京市に住んでいます！実際に足を運んで調査するフィールドワークができるのが，今から楽しみです！よろしくお願いします！

沖口　純
大阪府東大阪市の出身で，最寄駅は住道です。地理に関してはあまり自信がありませんが，関西の地名ならよく覚えています。趣味はスポーツ観戦（野球，サッカー，ラグビーなど）や野球をすること，旅行です（小旅行も）。

笠井佑太
兵庫の神戸市出身です。興味がある分野は都市地理です。フットサルやサッカーが好きです。よろしくお願いします。

神崎貴充
兵庫の山奥からやってきた，鉄道と自動車とカメラをこよなく愛する文学部民です。最近は高速バスも好きになり，またどこかに行こうかと考えています。とにかく，部屋の中でじっとしているのが嫌な人間です。これからよろしくお願いします！

バス1日巡検報告　淡路島の農業と鳴門・徳島・吉野川デルタ

酒井　啓裕

2013年５月11日（土）従来は一泊で実施していた春のバス巡検であったが，今回は実習調査が例外的に７月に遠方の帯広で行われるので，日帰りでの実施となった。淡路島・徳島方面に行き，自然・産業・歴史地理を中心としたあらゆるテーマにしたがってフィールドワークをおこなった。今回は大学院博士前期課程１年次生の方々と３回生が各自のテーマを決め，事前に資料を作成し現地・車中で説明した。

地下鉄西梅田駅に午前８時15分集合という，とても早い時間だったが，行程に差し支えるほどの遅刻をした人もおらず無事出発することができた。阪神高速道路，神戸淡路鳴門自動車道（明石大橋），西淡三原ICを経由して南あわじ市に到着し，淡路牧場にて観光酪農の見学とたまねぎ栽培地の見学を行なった。ここでは酪農家の方から淡路島における酪農の状況を説明していただき，淡路島の酪農が高齢化，後継者不足などで厳しい状況下に立たされていることを学ぶことができた。またここで試食したアイスクリームは，とても濃厚でおいしかった。淡路の酪農の現状を知り，自分たちにも何か応援できる方法はないかと考えさせられた。

昼食は道の駅「うずしお」にて淡路島の名産品であるたまねぎやしらすなどを使った本当に美味しい定食をとった。昼食後は淡路島南IC，神戸淡路鳴門自動車道（大鳴門橋），鳴門北ICでおりて鳴門塩田公園（製塩遺構）を見学した。ここには，江戸末期に完成した入浜製塩を行う福永家住宅が残されている（1975年，塩の文化を伝える貴重な建築物として国の重要文化財指定）。

次に藍住町歴史館（藍の館）にいった。徳島は阿波藍と言われるほど藍染めがかつては盛んな土地で，その起源は平安時代だといわれている。現在でも阿波藍の魅力は人々を引き付けている。ここは天保から明治にかけて大藍商として発展した旧奥村家の屋敷に建てられた施設で，大藍商の威勢を反映して作られた屋敷は優雅で手の込んだ建築物として高く評価されている。実際に歴史館の方からの説明を交えて，昔ながらの藍汁を使った藍染めをしているところを見学できた。藍汁は染料の発酵臭がきつくて作業は楽ではないが，真っ白なハンカチが本当に綺麗な藍色に染まっていく様子に感動するとともに，どんなに時代が経てもその美しさで人々を魅力し続けられる理由がわかった。

最後に文化の森総合公園（徳島県立鳥居龍蔵博物館）にいき，私たちはここで鳥居龍蔵について学んだ。鳥居龍蔵は，明治時代に活躍した鳴門市出身の人類学・民族学・考古学の研究者である。彼の探検・研究地は，国内はもとより，台湾，中国，朝鮮半島，シベリア，サハリン，千島列島など，東アジア各地におよび，彼は民族の言語，習慣，生活文化を調査し遺跡の発掘調査を行った。この博物館では鳥居龍蔵の研究における業績などを学ぶことができた。博物館見学後は，徳島市の中心部に戻り，藍を積みだした河岸で中心市街地の盛衰を観察し，再び大鳴門橋，明石大橋を渡って無事大阪に到着し解散した。

丸１日の巡検でバス移動が多かったが，実際現地に行ってみてやはり文献やネットからの情報だけでは得ることができないものが沢山あると感じることができた。その土地の匂いや空気に触れてみることが大事だし，そういったものに触れてみて初めてわかることや感じるものがあるんだなと再確認することができた。そして，さらにその土地のことをもっと知りたいという意欲も湧いてきた。実際に行って感じることの大切さ，フィールドワークの素晴らしさを実感できた本当に良いバス巡検だった。参加学生・院生50名，引率は伊東・野間教授であった。

（本学３回生）

徳島県藍住町 藍の館にて

実習調査報告

楽しかった帯広市での実習調査

久保　美佳

今年の地理学・地域環境学の実習調査は，2013年７月１日～６日の５泊６日の日程で，北海道帯広市で実施した。天気予報では後半に雨が降る確率が高いとされていたが，それほど雨が強く降ることなく，天候には恵まれた日々だった。

今回の実習では，学生29名，院生５名，教員３名の計38名が，それぞれ「農業・農村班」（農家の方へのヒアリング調査，帯広図書館での文献集め，関連施設の見学），「食産業班」（和菓子，洋菓子などの地元農産物の加工業者へのヒアリング調査や現地調査），「観光・合宿班」（スポーツ施設についての調査，ガーデン観光に関するヒアリング調査），「中心市街地班」（中心市街地内の土地利用調査，中心商店街の店舗に対するアンケート調査，中心市街地の活性化や中心市街地で活動をされている諸機関やキーパーソンに対するヒアリング），「工業団地班」（工業団地内の土地利用調査，企業でのヒアリング調査）の５つのグループに分かれて調査することになった。

私が所属する「工業団地班」では，調査１日目はまず帯広工業団地協同組合を訪れ組合の方のお話をうかがった。帯広工業団地に対する先方の思い入れが伝わってきて，私達の工業団地調査への意欲も一層高まることとなった。班では２グループに分かれ，片方のグループが企業訪問している間に，もう片方のグループは土地利用調査を行うというやり方で調査を進めることとなった。土地利用調査では，想像以上の工業団地の広さに苦戦した。しかしグループ全員の努力の甲斐があり，思っていた以上に早く終えることができたのは嬉しいことだった。３日間を通して７企業を訪れた企業訪問では，それぞれの企業の担当者１人が主に質問し，他のメンバーはメモをとるといった形式でヒアリング調査を行った。普段なかなか経験できない貴重な体験をしたので，皆それぞれが成長できたのではないかと思う。また企業の多くの方は熱心にヒアリングに応えて下さり，普段大学生活では聞くことのできないようなお話を伺うことができたのは有意義であった。

宿舎では毎晩全員集まり，ミーティングを行った。他班の一日の成果を聞くことによって，調査のモチベーションも上がることとなった。こうした今回の実習調査では，地理学のみんなの仲がより深まったように思う。５泊６日の長い実習の中では、それぞれつらいこともあったかとは思うが，みんな顔に出すことなく元気に実習調査に挑もうとしていたのが印象的であった。また，帯広の人の優しさにも感動した。「工業団地班」では特に市役所の方にお世話になったが，私達学生に対して熱心に，優しく接して下さったのには，何よりもうれしかった。調査に役立つようにと資料をたくさん用意して下さり，企業訪問全てに付き合って頂くなど，最後まで本当にお世話になった。そのほかにも多くの方々にお世話になったので感謝の気持ちを込めて，これから報告書を作成していきたい。

（本学３回生）

中富良野町 富田ファームにて

佐々木瑞帆
地理学専修には，もとから少し興味があり，色んなところに旅行に行くことが好きです。これから，よろしくお願いします。

田中奎司
兵庫県の西宮市出身です。日本の伝統文化，伝統工芸や観光に興味があります。これからよろしくお願いします。

田中睦月
出身地は，大阪府の吹田です。吹田市と言えば，万博記念公園で有名です。出身高校は南千里駅山田駅の近くにある千里ニュータウンにある学校です。興味のある分野は自然地理学が好きです。

谷口　萌
茨木市在住です。高校の授業をきっかけに地理が好きになったので，教員に少し興味があります。速記部です。よろしくお願いします。

中谷京子
大阪府東大阪市出身です。趣味は音楽を聴くこと楽器を吹くことです。観光，地域文化，資源など興味あります。よろしくお願いします。

八田歩美
滋賀県出身で宿場町で有名な草津に住んでいます。趣味は洋楽をきくことでマイリーサイラス・ブルーノマーズが好きです。地域の文化や伝統に興味があります。よろしくお願いします。

++研究ノート++

北京における八旗の所領範囲の復元及び風水思想

張　立宇

1．はじめに

周知のように，風水には「地理」「堪與」「相地」などの別名がある。風水とは，大地に流れる龍脈にもとづく占いで家や墓を作る時に，その場所の凶吉を判断する術である。それのみならず，東アジアにおいては，都城を設計する際にも，必ず風水思想を運用し，より良い都城の風水環境を創る。

たとえば，都城の立地を選択する場合，背山臨水の地に，東西両翼に丘陵に囲まれた土地が最も理想的な風水地と言われる。それは古代中国の四神思想によって，東に青龍，南に朱雀，西に白虎，北に玄武にあたる山脈，河川があれば，中央の都市の「気」が守られているからである。このような理想な風水地は「四神相応」の地と呼ばれる。

都城の立地を選ぶ以外，すでに建てられた都市内部にも人為的に風水のために工夫されたケースが少なくない。清の都城北京における「八旗」の配置方位がその一例といえる。ここでは，清代北京の八旗方位に込められた都城の風水思想を検討してみる。

2．京城八旗の駐防方位

八旗とは清の太祖ヌルハチによって創設された軍隊編制である。1601年最初に最初の四旗「黄・白・紅・藍」が作られた。1615年の改編により，縁取りのある「鑲黄・鑲白・鑲紅・鑲藍」四旗が加入し，最初の四つの純色旗と合計八つの旗となった。それを皮切りにして最初の黄・白・紅・藍四旗が「正黄・正白・正紅・正藍」と呼ばれるようになった。各旗の格式は正黄，鑲黄，正白，鑲白，正紅，鑲紅，正藍，鑲藍の順となる。その中では鑲黄，正白，鑲白三旗は皇帝による直領で，他の旗は各王が統領する。

北京は都城として，合計約９万人の八旗が駐防していた。『八旗通志初集』によると，八旗と駐防する城門の位置関係が詳しく記載されている。ところが，詳細な図があまりない。そのため，筆者は『八旗通志初集』の記述と『京城乾隆全図』に基づき，当時の八旗の各駐在地の復元を試みた。ここでは，鑲黄旗の満州官兵の頭参領と五参領を例として挙げる。『八旗通志初集・巻二』に鑲黄旗の満州官兵の頭参領と五参領の駐在つまり所領地が載っている。

史料１

自鼓樓向東循大街至經廠。為頭參領之十七佐領居址。（中略）自香兒衚衕東口向南。至府學衚衕。馬將軍衚衕。大興縣。騷達子衚衕。土兒衚衕。香兒衚衕。錢局週圍。為五參領之十七佐領居址。

『八旗通志初集・巻二』

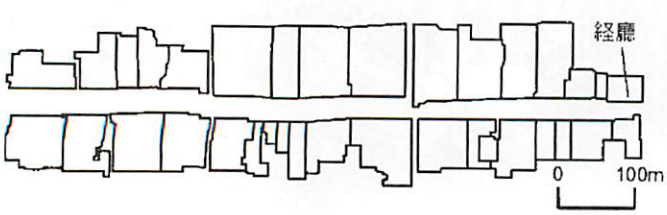


図１　鑲黄旗の頭参領在駐範囲

前掲の史料を参照して，『乾龍京城全図』に基づき，鑲黄旗の頭参領と五参領が駐在する地域を次のとおり復元した。

参領というのは，旗と佐領の間の単位である。頭参領いわば一番目の参領のことを指す。鑲黄旗の場合は合計五つの参領があって，図１は頭参領，図２は五参領の所領地の在駐範囲を示している。

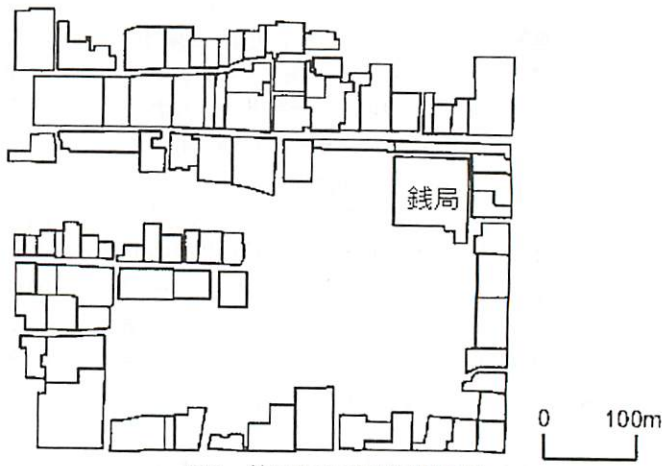


図２　鑲黄旗の五参領在駐範囲

頭参領領内におけるブロックの数は35で，五参領にある86の二分の一にも及ばない。ところが，参領内の重要施設からみれば，頭頭参領には，現在の北京市役所にあたる経廠があり，五参領では最も重要な建物は銭局である。また，図１と図２の縮尺が一致するため，頭参領が駐在する地域にあるブロックの平均面積が五参領領内の建物より大きいことがわかる。

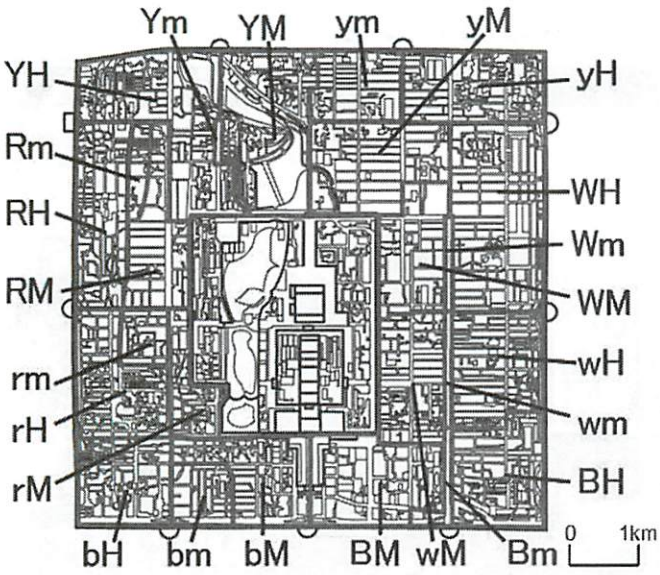
頭参領の所領ブロック数は五参領より少ないが，所領地域はもっとも重要なメインストリートであることが一目瞭然である。上述の方法を利用し，ほかの参領を比較した結果，一般的に領内における王府，役所，寺などの重要建築がある参領の所領ブロックは，比較的に少ないのではないかと考えられる。

他の旗ないし官兵の駐在地を上述の方法で推定すると，北京における八旗の各旗，各族官兵の駐在地が次のとおりとなった。

図３は『八旗通志初集・巻二』の記述に従い，光緒末年に描かれた「京師全図」をペースマップとして作った北京における八旗それぞれの勢力範囲図である。八旗は旗ごとに，満州官兵，蒙古官兵と漢軍官兵に分けられるため，グループ別に表記した。

図３をみると，正黄旗は北城壁内側の西，鑲黄旗は北城壁内側の東，正白旗は東城壁内側の北，鑲白旗は東城壁内側の南，正紅旗は西城壁内側の北，鑲紅旗は西城壁内側の南，正藍旗は南城壁内側の東，鑲藍旗は南城壁内側の西に駐防することが明らかになった。

総合的にみると，各旗における蒙古官兵の駐在地の面積が満州や漢軍より著しく小さく，位置としては，満州と漢軍の間に駐在する。皇城に接しているエリアの駐在者は満州官兵である。一方，最外層を守る役は漢軍官兵である。



凡例

YM正黄旗満州	yM鑲黄旗満州	WM正白旗満州	wM鑲白旗満州
Ym正黄旗蒙古	ym鑲黄旗蒙古	Wm正白旗蒙古	wm鑲白旗蒙古
YH正黄旗漢軍	yH鑲黄旗漢軍	WH正白旗漢軍	wH鑲白旗漢軍
RM正紅旗満州	rM鑲紅旗満州	BM正藍旗満州	bM鑲藍旗満州
Rm正紅旗蒙古	rm鑲紅旗蒙古	Bm正藍旗蒙古	bm鑲藍旗蒙古
RH正紅旗漢軍	rH鑲紅旗漢軍	BH正藍旗漢軍	bH鑲藍旗漢軍

図３　八旗の勢力範囲

３．八旗方位から見た風水思想

八旗を記載する書籍は雍正期の『八旗通志初集』と乾隆期の『欽定八旗通志』がある。『欽定八旗通志』は『八旗通志初集』の修正版であり，様々な不足事項を訂正し補足したものである。八旗の方位について二版の『八旗通志』は次のような記述がある。

史料２

兩黄旗位正北。取土勝水。兩白旗位正東。取金勝木。兩紅旗位正西。取火勝金。兩藍旗位正南。取水勝火。水色本黑。而旗以指麾六師。或夜行則黑色難辨。故以藍代之。

『八旗通志初集・巻二』

上の記述によると，八旗の方位は五行の相勝思想に従って決まった。五行の相勝は図４のように金が木に勝ち，木が土に勝ち，土が水に勝ち，水が火に勝ち，火が金に勝つというように，八旗の方位(北に黄旗，東に白旗，西に紅旗，南に藍旗）は恰も五行それぞれ本来の方位に当たる五行属性に勝つ属性と一致する。もともと水にあたる旗が黒のはずだが，夜の出征で見分けにくいため，藍色とされた。八旗の方位を考える際，おそらく八旗は最初軍隊の編制であった。戦争の時にも「敵に勝つ」願望があり，昔の五行思想の影響も強く受けたためこのような編成にしたのであろう。

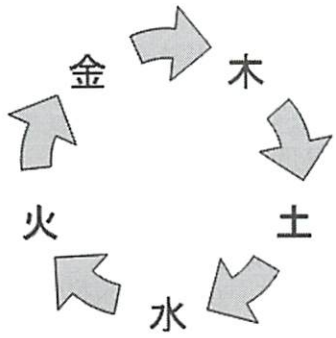


図４　五行の相勝（剋）関係
（矢印の先が前者に負ける方）

表１　五行及び方位などの属性関係

方位	四神	四季	五行	五色	五常
東	青龍	春	木	緑	仁
南	朱雀	夏	火	赤	礼
西	白虎	秋	金	白	義
北	玄武	冬	水	黒	信
中央			土	黄	智

また，表１のとおり北京のような東アジアの都城では，城内の区間も四神で表している。東エリアは青龍，西エリアは白虎，南エリアは朱雀，北エリアは玄武である。五行の相勝からみれば，木属性の青龍が東における金属性の白旗に負ける。火属性の朱雀が南における水属性の藍旗に負ける。金属性の白虎が西における火属性の紅旗に負ける。水属性の玄武が北における土属性の黄旗に負ける。まさに相勝関係にしたがっている。風水地理思想で考えれば，都城外の四神だけではなく，都城内部四つの方位にも四神が常にある。四神の属性に勝とうとした八旗の方位の決まりかたは，四方における四神の暴れを防ぎ，都城の風水を鎮めるための工夫ではないかと考えられる。

４．まとめ

都城の風水思想は多くの側面がある。都城の立地を考える以外に，人文的な側面が重視された。北京城は周辺環境だけではなく，城内の風水を考える際にも八旗駐防のような工夫がされたことはその一例と言える。本研究は北京における八旗の所領を各族単位まで復元し，方位に関わる風水思想について初歩的な検討を行った。北京における八旗は各方位に駐在し，各族の旗が領有するブロックの中においてもバランスがとれるように領有が配分された。八旗を配置する時，五行思想ないし四神思想に従って，都城にとって風水上の最有利的配置をとることが分かった。

しかし，本研究においては，細部における考察が不十分と痛感している。例えば，同じ旗の中では，「正の旗」と「鑲の旗」の領有地の形が不整然に見えるが，それが何のため決まったのであるかという問題は今後の課題だと感じている。

（本学博士課程後期課程２年次生）

参考文献

鄂爾泰等（1985）『八旗通志初集・巻二』東北師範大学出版社
吉野裕子（1983）『陰陽五行と日本の民俗』人文書院　１頁―37頁
孫景浩（2009）『周易與中国風水文化』上海古籍出版社　１頁―288頁
鉄保等（1968）『欽定八旗通志・巻三十一』台湾学生書局
国立情報学研究所―ディジタル・シルクロード・プロジェクト『乾龍京城全図』http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/II-11-D-802/V-6/page/0006.html.ja
陶明友（2012）『人居優選法』華齢出版社　９頁―26頁

的場　梓
富田林市から通っています。旅が好きで，バックパッカーでいろいろな場所に行くことが最近の楽しみです。体を動かすことも好きで山に登ったり，急流下りをしたり，走ったりすることもします。将来，発展途上の国で村おこしや観光業などをしたいと考えていて，観光や土地について学ぶことができる地理専修に来ることを決めました。よろしくお願いします。

山崎　凌
大阪の都市の移り変わりなどに興味を持ったことがきっかけで，大学で地理学を学びたいと思いました。よろしくお願いします。

山岡万莉
大学に入ってから地理に興味を持ちました。観光に興味があります。よろしくお願いします。

吉田美和
京都の宇治から通っています。宇治は10円玉でも有名な平等院や宇治川など，有名な場所が多いです。私は都市や観光について興味を持っています。趣味はおいしいものを探して実際に食べに行くのが好きです。これからよろしくお願いします。

ホームページ開設のお知らせ

関西大学地理学・地域環境学教室のホームページを開設いたしました。URLは以下のとおりです。
URL:http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/

今後の研究会行事

関西大学地理学研究会事務局

1．地理学研究会研究例会の開催のご案内

下記の要領にて，恒例の地理学研究会研究例会を実施します。研究発表会に先立って，実習調査（北海道帯広市）の中間報告もいたします。また，懇親会も開催しますので，万障お繰り合わせの上，多数ご出席ください。なお，研究会後の懇親会にご出席の方は，12月10日までに，井上拓大までお申し込み下さい。なお，研究例会に関する問い合わせは，伊東理まで（携帯：090-5665-3450）。

1　日　時：平成25年12月14日（土）15時開始　20時頃解散
2　会　場：関西大学第１学舎１号館　A301教室
3　講　演（15：00～18：00）
　北海道帯広市実習調査　中間報告（博士前期課程院生による）
　研究発表　張　旭（関西大学大学院）「東アジアにおける古建築の装飾物の地域差異及び形成の原因」
　本岡拓哉（同志社大学）「都市マイノリティをめぐる〈空間・場所・景 観〉の生成と消滅―大阪・桜ノ宮「龍王宮」を事例に―」
　木庭元晴（関西大学）「奈良盆地南縁に分布する低位段丘構成層の堆積原面の侵食ベースレベルを使った復元」
4　懇親会（18：15～19：45）於：関西大学第１学舎食堂（１号館１Ｆ）会費3,000円

2．秋の日帰り巡検

恒例の日帰り巡検を下記の要領で実施いたします。卒業生，現役学生のご参加を期待しております。担当は高橋。

テーマ：奈良町の歴史景観と観光活性化
日　時：平成25年10月27日（日）集合：近鉄奈良駅行基像前広場，９時30分　その他：雨天決行
コース：近鉄奈良駅―東向き南商店街―三条通―餅飯殿商店街―元興寺周辺―奈良町格子の家―近鉄奈良駅（昼食のため一時解散）―東向き北商店街―奈良町北部―奈良奉行所跡―法蓮町（法蓮造り）― 一条通―聖武天皇陵―転害門―近鉄奈良駅（17時ごろ解散予定）
費　用：昼食代各自負担以外特に予定しておりません。
案内者：大学院生（M1）　教員担当は高橋誠一
連絡先：10月20日（日）までに方立までお申し込みください。
　e-mail：fangli881213@hotmail.com　TEL：080-4563-1213

卒業論文・修士論文一覧（2013年３月卒業・修了生）

＜卒業論文＞

荒巻　祐貴　1990年以降のエスニック料理のファッション化
伊地智　遥　ハンセン病その偏見の諸相と構造　―俗信・国家・地域の視点―
入江　真央　神道における方角観と神社
梅田　真吾　箕面川流域の崩壊地形とその分布要因
江口花菜子　那覇中心市街地の現在と将来　―浮島通りとパラダイス通りを中心として―
奥野　晶士　千里中央地区の再開発による変容
角野麻莉子　ガーデニングを利用したまちづくり・ヒューマンライフネットワーク
―兵庫県三田市の活動を事例として―
貴志　健司　高速道路における湾岸線の役割とその課題　―阪神高速道路を中心に―
小池　清訓　安威川流域平野部に分布する沖積層と低位段丘構成層の地形及び
窒素・炭素同位体比による区分
坂元　由梨　いなみ野台地のため池
角田　静佳　大阪駅前ビルにおける大阪駅前市街地改造事業
田中　優生　阿波・大阪・木更津における狸文化の伝播とその関係性
田邉　知世　京都市都心部における破壊と再生　―姫小路通を中心に―
中川　夏姫　宮城県牡鹿郡女川町出島で営まれてきた暮らしと震災後の生活再建
西井　千恵　大阪のウォーターフロント開発
日野　翔太　飛騨高山のインバウンド観光戦略　―地方の歴史的な都市を事例として―
藤森　麻希　神戸市の先端医療に特化した都市づくりの取り組み
―医療産業都市構想への展望―
松岡　美佳　児童が学童保育でどのような体験を得ているのか
水迫　良輔　近現代の天皇陵における風水思想
森　　羊亮　熊取町の都市化の諸相　―人口データからみた地域的動向を中心として―

＜修士論文＞

廣田　琢也　日本における都市交通政策と公共交通
徐　　笠凡　安定炭素・窒素同位体比と箕面川流域の土地利用との対応関係
竹下　裕隆　金魚：その人との関わりの文化史と生産・流通　―大和郡山と弥富を中心に―
張　　瑩　東アジアにおける渤海国交流ルート　―渤海・日本間の交流ルートを中心として―
李　　巍　遼寧省における多民族共生地域の食文化
―漢民族・満州族・朝鮮族の独自性と融合化―

新院生紹介

博士前期課程

家村一平
奈良大学からきました家村一平といいます。枚方市出身です。地図帳を読むことが好きで地理学に興味を持ちました。

井上拓大
大学時代は人文地理学を専修していました。人文地理を通して日本や世界のことを深く知りたいと思っています。現在は都市における商業の変遷に興味を持っています。よろしくお願いします。

王　大斌
私は中国遼寧省葫市から来ました。潜水艦の基地として有名です。中学から地理という学科が大好きでよく地図を読みました。大学で地理を勉強しようと思いましたが，中国では地理は理系の学科なのであきらめて日本語を専攻しました。よろしくお願いします。

方　立
中国からの留学生です。地理の勉強を通じて，自分の住んでいる地球をもっとわかるようになりたいです。これからもよろしくお願いします。

林　頴
２年前，中国の山東省威海市から日本に来て，日本語学校で日本語の勉強をしながら，日本の地理・風俗にも大変興味を持つようになりました。よろしくお願いします。

教室だより

■学生数

平成25年度当教室新入生は，新２回生18名（男子５名・女子３名），修士課程１年生５名（男子３名・女子２名），であった。４月25日（木）に新入生歓迎コンパをフランシスベーコンで開催した。学部生66名。大学院生12名の総計78名になった。

■春のバス巡検

例年，春の巡検は一泊でおこなわれていたが，今年度は日帰りの巡検であった。５月11日（土）に下記の要領で開催された。テーマ：淡路島の農業と鳴門・徳島・吉野川デルタ。参加学生は地理学地域環境学専修の２～３回生，博士前期課程１年次生ほかであった。地下鉄西梅田駅，午前８時15分集合。コースの概略：西梅田駅，淡路島牧場，道の駅うずしお（昼食），鳴門塩田公園（製塩遺構），藍住町歴史館（藍の館），徳島県立鳥居龍蔵博物館を回った。引率：実習担当者（伊東・野間）であった。

■M・D合同中間発表

７月20日（土）13時00分～17時50分まで地理学・地域環境学教室で行われた。発表者は，所夏弥，牛錯，張立宇，張旭，齋藤鮎子，舟越寿尚の６名。

■教員の海外出張

野間晴雄：４月18日～４月24日ベトナム・フエに出張。アジア文化研究センター経費で，フエ歴史GISデータベースに関する打ち合わせ。７月20日～28日バングラデシュ。科研費による茶園とプラントハンター調査。９月24日～2014年３月23日 在外研究のためスペイン，メキシコ，アメリカ合衆国に滞在予定。

伊東理：８月15日～９月１日アメリカ合衆国・カナダ。北米都市のダウンタウンの再生に関する資料収集と現地調査。

■新任非常勤講師紹介

今年度新たに大学院非常勤講師としてご出講いただいているのは，山下清海（筑波大学教授），松本太（東京都環境科学研究所調査研究科 非常勤研究員），淡野明彦（奈良教育大学名誉教授）の各先生方です。

随想

時間的隔たりの克服
—地誌を担当して—

正木　久仁

「2013年は大正元年から数えると100年になる」という言葉から，私にとって大正という時代は遠いのか近いのか，と下らないことを考えたことがあります。私は1948年生まれで大正を生きた経験がありません（当然！）が，両親を含め身近に大正生まれや明治生まれが大勢いましたので，明治はさておき，大正を遠い存在として意識することはありませんでした。大学の授業等で大阪市の拡大や郊外の形成が大正から昭和戦前期に進んだということを聞き，普段利用している電車や近くの住宅地がそれにあたると気づいたとき，大阪の郊外住宅地で育った私にとって大正という時代が身近に感じられたこともありました。直接体験はなくても，随所に残る面影を手掛かりにリアリティあるイメージ（地域像）を描くことができたからかもしれません。

「20世紀は郊外の時代」ともいわれますが，初期の郊外住宅地と戦後の住宅不足時に建設が進められた住宅地ではプランも出来上がった姿も異なります。また，都市の過密，劣悪な住環境に対抗して提唱された郊外居住の理念を背景とする初期の郊外住宅地も，さまざまに変容してきたことは周知のことでしょう。非住宅機能の侵入，相続等を契機とする土地の細分化などは広くみとめられますが，最初期（明治末）の郊外住宅地であるM住宅地では非住宅機能の侵入や土地の細分化が少なく，初期の状態を比較的よく残しています。非住宅機能の侵入が少ないのは駅から入り込んだ位置にあることが関係していますが，細分化については位置的理由だけでは説明できないと思います。ここの住民によると，細分化が起こりそうになったとき，業者ではなく，住民間のソーシャルネットワークを通して対処したこともあったそうです。そのような積み重ねの結果，初期の良好な住環境が維持されたことに住民は誇りをもっていました。そこには自治組織を通して形成されてきた住民間の信頼関係が果たした役割があることが強調されていました。同様なことはM以外でもあるはずです。地域変化，地域形成を物質的社会的側面だけでとらえるのではなく，住民のメンタル面にも注目して場所のイメージを描く必要があるように思います。

学生に地域イメージを描く作業を課すことがあります。大阪市船場地区では，ビルの間に商家や薬種店，幼稚園，理髪店などの木造建築，大正期から昭和戦前期に建設されたレトロビルなど，建築様式や建設時期の異なる建物がみられます。それらの点情報を地図化することにより線的，面的な構造を導き出します，古い写真や地図（例えば，『大阪市パノラマ地図』）を参照することにより，多様な要素が併存する地域の形成が把握しやすくなると思われます。しかし，「過去の」建築がなぜ息づいているのか，の答えとしては不十分でしょう。これらの建築物は必ずしも遺跡として残されているのでもなく，経済的理由で残らざるを得なかったとも決めつけられません。経済的理由で建て替えが見送られたこともあったかもしれませんが，別の形での利用価値が見出されている場合もあります。堺筋に面して建つK商店の場合は企業の象徴としての意義がみとめられているようですし，明治期に幼稚園の建物として新築されたA幼稚園の場合は，明治期に商家の人たちが資金を出し合って設立したということに加えて，決して古びることなく現代のものにも勝るといえる園舎を建てたという自負もあるように見受けられました。いずれの場合も，所有者や利用者が経済的なものに限らない価値をその建物に見出していることをとらえる必要があると思います。

地誌を担当して，地域形成過程を解き明かし地域像を形成するには，空間的隔たりと時間的隔たりを克服することが学生にも教員にも求められると実感しています。空間的隔たりについては「そこへ行く」という手段がありますが，時間的隔たりについては直接体験が不可能な場合がほとんどですから，文献や地図，絵画，写真等同時代の史資料をできる限り動員していく以外に考えられません。「明治は遠くなりにけり」という言葉がありますが，今の大学生にとっては明治どころか昭和も遠い存在かもしれません。この言葉は，大学生だった中村草田男が昭和６年に母校の青南小学校（東京市赤坂区）を訪れた際に詠んだ俳句「降る雪や明治は遠くなりにけり」に由来するもので，明治が終わってわずか20年後のことだそうです。大正をこえて久しぶりに小学校を訪ねて感傷的になったのかもしれませんが，私は感傷的になるだけではすまないのでしょうね。

（大阪教育大学名誉教授，関西大学非常勤講師）

千里地理通信　第69号
2013年９月24日　発行
関西大学地理学研究会
〒564-8680　吹田市山手町3丁目3－35
関西大学文学部　地理学・地域環境学教室内
編集担当：高橋誠一　家村一平　方　立
TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）
e-mail：kugeoenv@gmail.com
郵便振替：大阪00970－4－81149